

DELF A1 の紹介 An Introduction to the DELF A1

三上純子
Mikami, Junko

Abstract

The DELF is a part of a set of official French proficiency tests. It consists of 4 levels which correspond to the levels defined in the CEFR. My focus in this paper is on the examination contents and evaluation points of the DELF A1.

1. はじめに

昨年度から本センターでは、わかりやすい言語運用能力の物差しを求めて、CEFR（ヨーロッパ共通参照枠）の研究を始め、本学の言語教育の到達目標としてCEFRを活かす方向を模索しつつある。CEFRのレベルの具体的な運用のあり方を知る一つの方法として、フランス語では、CEFRに準拠したDELF・DALF 国民教育省フランス語資格試験を概観することが挙げられよう。CEFRに対応した形でDELFはA1・A2・B1・B2、DALFはC1・C2から構成されている。筆者は本学のフランス語の初級段階の到達目標を考える上では、まずDELF A1の内容の把握が重要だと考えた。DELF A1の出題例には語学雑誌等で触れることができたが、口頭試験での試験官とのやり取りの状況等をより具体的に知りたいと思い、今年度自分で受験してみた。また2010年8月23、24日にはフランス大使館主催の研修会 Formation «Connaitre le DELF»に参加する機会を得た。そこで本稿では、こうした体験を踏まえて、DELF A1ⁱの出題例および評価方針について報告するとともに、本学におけるこの試験の活用の意味について考えてみたい。

2. DELF A1の概略

DELF A1については、DELF・DALFの公式ページⁱⁱに以下の説明がある。

CEFR A1 フランス語の基本レベル。日常生活での単純で具体的な状況を理解できる。相手がゆっくり話すなら、簡単なコミュニケーションが可能。に対応

DELF A1 学習時間の目安：約80時間

聴解：日常的な事柄に関する、3、4つの録音された短いテキストを聴き、設問に答える。

(20分)

読解：日常的な事柄に関する4、5つのテキストを読み、設問に答える。(30分)

文書作成：試験は次の2要素から構成される。(30分)

- カードや申請書に記入する

- 日常的な事柄に関して簡単な文章（葉書、メッセージ、説明文等）を作成する

口頭試験：試験は次の3要素から構成される。（準備10分／面接5〜7分）

- 試験官の質問に答える
- 情報を交換する
- 架空のシチュエーションを設定して会話を展開させる

それでは私が受験した際の問題について、簡略に報告したい。聴解の問題は4問で、内容は1) 飛行場でのアナウンス、2) 留守番電話の録音、3) ラジオの広告番組、4) 絵に関連した会話であった。それぞれ2回聞いて、内容についての質問に選択肢から選択して答える。数字は書く必要がある。スピードは市販されている DELF の練習問題集の録音よりもやや遅かったが実用技能フランス語検定試験3級にくらべると速かった。

読解は4問。内容は1) 人物の紹介文、2) メール、3) メディアライブラリーの説明文、4) 絵とその絵に関連した文であった。これもそれぞれのテキストに含まれている情報に関する設問に選択肢を選択して答えるが、2) については地図に道順を記入する問題もあった。基本的に質問は全体から部分へという順序で配列されている。

文書作成は2問。1) メディアライブラリーへの登録文書の作成（氏名等の記入）と2) 誕生日パーティに友達を招待するメール（場所、時等の情報を入れる、40〜50語）であった。テーマは異なるが、読解問題にメールの文があったので、受験者は文書作成の時に、そのフォーマットを参考にすることができた。受験者は試験を受けながら学べるわけである。

口頭試験はネイティブの試験官から問題についての説明を聞き、選択の可能性のある問題については問題を選択した後に、別室で10分準備して受験する。内容は1) 試験官からの質問に答える形での自己紹介、2) 数枚の基本単語を書いたカードを使った試験官への質問、3) ロールプレイ（私の場合は、駅で列車のキップを買うというシチュエーション）であった。試験官の話すスピードはかなりゆっくりしており、受験者がすぐに答えられない場合も違った形で質問を繰り返して、答えを促す等の親切な態度が見られた。

以上のように、DELFL の試験問題は A1 の段階からフランスの日常生活で実際に出会う状況を素材としている。したがって受験者がこの種の問題に対応するためには、フランスの駅や空港でのアナウンスのパターンや買い物の仕方等を知っていなければならない。文書作成では葉書やメールの書き方を学んでいることが必須である。フランスでの生活経験がある方が有利な試験ではあるが、研修の際の講師によれば、DELFL A1 と A2 については、フランスで作成された、CECR に対応した総合フランス語教材を使って実践的に学んでいれば、特に対策を考えなくても資格取得は可能とのことであった。なお、抽象的なテーマを扱う B1 に取り組む場合には、論理的な文章や議論を構成する練習が必要になるとの見解も示された。

A1の口頭試験においては、試験官が受験者にできるだけ話をさせるように振舞うことはすでに指摘したが、現実のコミュニケーションに近い状況をこのような好意的な雰囲気の中で体験できるという意味では、ある程度の準備をして受験すれば、初学者にとって、この試験の受験は次のステップへのモチベーションを高める効果を持つのではないかと思われる。

序でながら、受験者に有益と思われる情報を付け加えておく。

- ・ DELF A1・A2・B1・B2では筆記、口頭試験（準備時間も含む）ともに辞書は使用できない。
- ・ 筆記用具は鉛筆やシャープペンシルではなく、ボールペンやペンの使用が義務づけられている。
- ・ 文書作成や口頭試験の準備では下書き用紙が配布されるが、この紙も試験終了後回収される。答案の作成過程を見ることで、加点できる場合もあるからの説明であった。

3. DELF A1の評価方針

次に、DELTA A1の評価方針について研修で得た知見を交えて報告したい。配点は聞き取り、読解、文書作成、口頭表現の各分野25点満点で、資格取得のためには100点満点中50点以上の得点が必要となる。また、各分野において最低5点の得点がないと50点以上の得点があっても不合格とされる。50点以上で合格というのは甘すぎるという意見もあろうが、これは能力記述文の70%の達成を目標とする考え方に基づいているとのことであった。

ただし、各分野における最低得点が5点でよいという仕組みは、個別の技能の評価としては厳密さを欠く場合もあろう。研修時に聞いた話によると、DALF C1を取得しても、TCF（英語のTOEICのようなコンピュータによる能力試験）では個別の技能がB1やB2と判定される例もあったそうである。実のところ、同じ段階の資格を取得していても、スコア50とスコア100の間にはかなりのコミュニケーション能力の差があると思われる。教員としては、学生の資格取得の結果だけでなく、個々の分野のスコアにも注意を払う必要がある。

さて、試験の採点においてもっとも難しく思われるのは、文書作成と口頭試験の採点である。興味深い問題ではあるが、ここでは研修時の資料を参照しつつ、DELTA A1の大枠の評価の考え方を示すにとどめたい。

まず、すべての評価項目はCEFRに対応したCan do形式で作成されており、観点別の評価が行われるという特徴がある。文書作成では申請書等の記入の問題を除いて、指示の順守、叙述能力、語彙力等の項目に点数が割り振られ、それぞれの項目の達成度による評価が行われる。口頭試験では、面接、情報交換、ロールプレイの個々の課題の達成度と全体を通じての語彙、統辞形態、発音の能力評価が組み合わされて総合評価が出される。A1の段階

では、多くの能力記述文に「単純な」、「基本的な」等の表現が見られ、綴り字や文法の初歩的な間違いがあっても許容されることが示されている。

研修では、採点基準をもとに、葉書の答案例や口頭試験の面接ビデオを見て参加者間で採点を行ってみたが、初めは減点しすぎている人が多かった。一般に、日本人教員にはネイティブをモデルとした学習観が強く、文法や発音の正確さを重視する傾向があるため評価が厳しくなってしまうのではないだろうか。観点別評価のさじ加減は難しいが、観点別に評価すると、初歩の段階でも部分的な能力を積極的に評価できる面がある。綴りや文法に不確実な点はあっても、その場その場でコミュニケーションの目的が達成できればよいという行動中心の評価のあり方は、外国語学習の敷居を低くし、学習者を複言語の学習へと誘う可能性を持っていると感じた。

なお、研修時に DELF・DALF の各レベルの学習内容を理解するための参考文献として *Référentiel de programmes pour l'Alliance Française élaboré à partir du Cadre européen commun A1-A2-B1-B2-C1-C2*, Alliance Française Clé international, 2009. を推薦された。A1 から C2 までの聴解、読解、口頭表現、やり取り、文書作成の各分野における、技能、言行為、文法、語彙、社会文化的知識の目安が掲載されており、大いに参考になることを付記しておく。

4. 終わりに

さて、以上 DELF A1 の試験内容と評価方法のあらましを紹介してきたが、この試験に見られる言語運用能力の到達度評価を、本学のフランス語教育においてどのように活用できるであろうか。この試験は基本レベルとはいえ、きわめて実践的な運用能力を問うものなので、本学の学生の場合、初級の授業を終えた後も週 2 コマの授業を 1 学期は受講した後でないと難しいであろう。ただし、受験できるセンターが限られる、受験料が高い（教育機関ごとに一定数の受験者がいれば団体受験もできるようになったが、個人で登録すると A は受験料 10000 円）といった問題もあり、当面、力試しに活用する可能性があるのは短期留学を終えた学生や協定校に留学する学生等に限られそうである。

ただ、CEFR に対応したこの試験の精神を本学のフランス語教育に活かす道はあると思われる。それは、よりコミュニケーション能力の養成を目標とした授業方法を考えることである。初習言語の場合、ほとんどの学生が大学で初めて学ぶので、文法の学習は大切である。しかし、文法と会話の授業の連携が密でない現状では、文法事項を学んでも、実践に結びついた練習が不十分なため、大部分の学習者はコミュニケーションシーンで使えるフランス語を身につけるに至っていない。

初歩の段階から実践を重視した授業を考える上で有効と思われるのは、CEFR の A1 以前の、あるいは A1 を細かく区分した Can do 形式の能力記述文の作成である。『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』には、A1 レベル以下の能力

記述文の例として「日、時間、日付など尋ねたり、言ったりできる」、「簡単な挨拶の表現を使える」「はい」、「いいえ」、「すみません」、「どうぞ」、「ありがとう」、「ごめんなさい」が言える」などが挙げられているⁱⁱⁱ。このような平易な実践とそれに関連する文法事項を組み合わせたシラバスを導入する必要があるだろう。

段階的で細かい目標設定は、DELF A1 の評価方法に見られた、部分的な能力を積極的に評価するという姿勢にも通ずる。学び初めの時期は、ともすれば発音や文法の違いに注目し、学習者にマイナスの評価を与えがちであるが、単純な能力記述文と観点別の評価により学習者に日々小さな達成感を与えられれば、学習意欲の上昇につながるであろう。今回の研修では、自分自身、授業目標をコミュニケーション重視にシフトしながら、評価方法は文法中心から抜け切れていないのを反省した。ある程度の違いを許容する雰囲気がないと、間違いを恐れずコミュニケーションする学生は育たない。より実践的な言語運用能力の養成を念頭におき、学習者を励ます対応を日常の授業にも取り入れてゆきたい。

注

ⁱ DELF A1 には、成人向けの試験の他に、児童・青少年を対象とした DELF ジュニアとビジネスマンコースがあるが、ここでは成人向けの試験についてのみ報告する。

ⁱⁱ <http://www.calosa.com/delfdalfjp/index.html>

ⁱⁱⁱ ジョン・トリムほか著、吉島茂ほか訳・編：『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、朝日出版社、2008、p. 27.